

ゲノムとEBM時代の新しい医療

永井 良三

東京大学医学部附属病院 病院長

Ryozo NAGAI, The University of Tokyo Hospital

現在の医療は「根拠に基づき、個々の患者に最適な医療」を目指している。疾患の診断法や治療法は、多段階の研究を経て確立される。確立された医療行為の有効性評価は、急性期疾患では数十例の症例における検討で十分であるが、生活習慣病や高齢者疾患に対する効果判定には、大規模臨床研究が必要である。

医療の実践にあたっては、人間愛をもって患者の訴えに耳を傾け、ケアに必要な問題点を把握し、個々の医療上の問題を解決できることが必要である。検査や治療の必要性の判断（適応）、インフォームドコンセントの実践、高い技術による医療行為の実施、治療経過の適切なカルテ記載などの能力が求められる。同時に、既存の医学・医療に対する批判的考察と新たな仮説の設定、議論を通じた軌道修正、その上で医療倫理、医療経済、医療法律等への理解が求められる。さらに個別医療の実践には、言葉でコミュニケーションを行うだけでなく、言葉では語られない患者の価値観についても洞察できる能力の育成が必要である。

医療のもつ「科学的側面の理解」と「現場での実践」は、前者が絶対的価値観に基づくのに対し、後者が我が国固有の精神文化に基づく相対的人間関係の構築だけに両立は容易ではない。日本人に適した医療の確立には、薬学の科学から実践までを俯瞰する教育体制が必須である。